

ましろのかみにてをのばす

文鳥

潰す、叩きつける、かき回す。この行為が何ら高尚なところのない、ただの暴力性の発露だと知られたら、失望されてしまうだろうか。

画用紙の白さを憎むように色を重ねる子供だった。というより、今もそうなのだろう。目の前にそびえたつキャンバスは元の無垢など見る影もなく、あらゆる色を吸い込んで濁り切っている。自由な青も光を砕いた黄色も鮮烈な赤も混ざってしまえばただ汚らしいだけで、どんなに清廉な白だって重ねればあっけなく死んでしまう。そのはずなのに、そうでなければいけないのに。パレットの中から目に付いた色を絵筆で掬い、画面にぶつけようとして、はたと動きを止める。ふつと何かが途絶えた感覚。絵筆を持った手がだらりと落ちた。暗い世界の真ん中がゆっくりと深さを増して、立ったまま沈んでいくような幻想。いつまでそうしていたのかわからないが、思考の外側からカタリと小さな音が鳴った。

「ねえ、今日も描いてるの？」

振り返らない。世界の隅に亀裂が入る。

「ねえ、聞こえてるんでしょ」

振り返らない。亀裂から世界がはらりと散っていく。

「ねえってばっ」

一気に視界が弾けるような錯覚。澱みを押し流すような光の奔流。全てを塗りつぶす曙光のような傲慢なまでの無垢。だんだんと大きくなる

声に耐えかねて、視線だけをそちらに向ける。薄暗い部屋の中に浮かび上がるような白がゆらゆら揺れて、仔猫のような青灰色がゆるりと細まった。

「邪魔すんなよ」

「だって立ったまま動いてなかったじゃん」

床、汚れちゃうよ。彼女が指差した先をのろろと見ると、筆先から垂れた絵の具が小さく斑模様の水溜まりを作っていた。返事の代わりに舌打ちは反論の言葉を持たないからだと理解していた。

クラスの人気者が陰口を言っているのを聞いて胸を撫で下ろす。偉人の汚点を学んで唇の端を吊り上げる。それがどうしようもなく俺だった。キャンバスの中心、乾いた絵の具の上に手を置く。万の色彩が蠢く目を背けたくなる一色。この絵こそが俺だった。だから彼女がこの部屋に現れた瞬間、どうしようもなく怖気が走った。陽光を紡いだ白髪。晴天と曇天を混ぜた青灰が真っ直ぐに俺を射抜いて、色のない肌の中で薄桃の頬と唇が映えた。彼女は俺の事などお構い無しにキャンバスに近づき、体を曲げてしげしげと眺めていた。そして、永遠にも思える刹那の後に息を殺す俺を見て花唇を開いた。

「綺麗だね」

その丸い瞳の眩しさに、浮かべた笑みのあどけなさに、何より弾んだ声音で紡がれた言葉に、俺は酷く絶望してしまったのだ。

キャンバスを前にしてパレットに絵の具を出していく。きつとこのテーマには透明水彩が良く似合う。輪郭線を引くことはしない。降り注ぐ光と零れ落ちた影を描くだけだ。無駄な力を入れずに撫でるように筆をすべらせる。淡い灰色や柔らかなクリーム色が像を浮かび上がらせ、頬や唇には花卉を一枚溶かしたような淡紅色を刷いた。光に溶け込む淡さの中に、夜明けを切り取った青灰色を凜と咲かせる。そうしていくうちに像を結んだのは白絹の髪と黒子一つないミルク色の肌を持つ一人の少女だ。斜め下を向いて長い睫毛を伏せ、はにかむように微笑んでいる。本物には遠く及ばないが、写真よりは遙かに温度があった。我知らず唇の端がほころんだ。パレットに不透明水彩絵の具を目に付くままに出してぐるぐると水をつけた筆でかき混ぜる。そして、画用紙の中で笑う少女の顔に走らせた。淡く澄んだ色彩を切り裂いた汚濁はひどく目立つ。それを繰り返すうちに花笑みの少女は姿を消して、残ったのは救いようのない泥濘だけ。こんなちっとも綺麗じゃない。そんなふうに称されていいはずがない。窓を開けて日差しを取り込めばここから立ち去ってしまうだろうに。点る限りの電灯をつければ初めから居なかったようにここへは来なくなる癖に。いつかの何気ないたった一言がキャンバスの底に巢食っている。ああ本当にどうしようもない。

あの長く澄んだ白い髪を掴んで泥中に引き倒したなら、あの細い首に指を食い込ませたなら、こんな馬鹿馬鹿しい妄想を彼女に告げたなら、少しくらいは濁ってくれるだろうか。彼女が他の誰でもなく自分だけを見つめ、眦をつり上げたなら、おそらく一瞬は例えようもなく胸が躍る。それからきつと身勝手にも酷く失望してしまうのに。

柔らかな絹の御髪を切り刻む幻想を隠して画用紙を汚す。描いたあの子を塗りつぶす。そうして今日も穢れなき真白の神に手をかけるのだ。